



DRAMA かながわ No.90

Theater Association of Kanagawa November 2023

芝居塾「OZ～異世界で三太郎に出会うなんて聞いてませんが! ?～」
TAK in KAAT「血の底」 / 2023年度神奈川県演劇連盟合同公演情報 /
劇団探訪 ドリル饅頭 篇 / 資料室だより ほか



芝居塾～ビギナークラス～

『OZ～異世界で三太郎に出会うなんて聞いてませんが！？～』
2023年8月18日(金)～20日(日) 岩崎ミュージアム『山手ゲート座ホール』

【総評】文：横山銀芽 (G/9-Project)

■応募と説明会

今年四月、15～29歳までの青少年をターゲットに塾生募集を開始し、結果5名のエントリーがありました。そして五月に説明会を開催。そこではG/9-Projectのメンバーが中心となり、八月の本番公演の「前日譚」を披露しました。馴染みあるキャラクターが一つの話で繋がるという事に興味を持って頂いたようで、最終的に五名全員が参加意思を表明してくれました。みんな澁刺としていて、これから始まる芝居塾が情熱的な物になる事を予感させてくれました。運営としてたいへん有意義な企画に関わらせてもらったと感じた事を今でも覚えております。こうして芝居塾は前途有望な門出を迎えることができました。

■稽古へ

「芝居は心のキャッチボールである」と劇団では教えていますので、座組みのみんなが気兼ねなくコミュニケーションの取れる稽古を計画しました。第一回目の稽古内容はシアターゲーム。一から関係作りを行うには共通のルールの下で遊ぶ事が大切です。塾生は役者を志すだけあってコミュニケーションを取るのがうまく、あっという間に仲良くなっていきました。

二回目からはよいよ芝居について座学を開始。まずは台本を読んでもらい芝居の楽しさを知ってもらいつつ、演技、物語の構成、役作りなどの難しい事柄も教えていきました。練習用台本に会話劇を使ったところ、はじめは照れる様子もあったのですが、一人が元気に演じ始めたら徐々にそれが広がっていき、若者らしいテンションの高い芝居が出来上がり、チームワークの良さを感じました。演出家も今回の芝居は塾生を一つのチームにしようとする事に。

その後は舞台の裏方や、制作がどんなことをしているのか、役者以外の仕事も講義を行い、衣装作り、小道具作りへと進んで行きました。G/9-Projectはどんな芝居をしたいのかという事を役者同士で話し合います。芝居塾においても例外では無く、塾生にも物語作りに参加してもらい、衣装のコーディネイトや小道具作りも一からやってもらいました。演技の練習と並行しての衣装・小道具作りは大変だったと思いますがみんなで助け合いながら、見事な衣装・小道具を作り上げてくれました。

■いざ本番

オズの魔法使い、桃太郎、金太郎、浦島太郎のお話の内容を織り込んだSFファンタジーで、塾生の五名全員に主役級の役を演

じてもらいました。初めての芝居で主役を演じるのは非常に大変だったと思いましたが、三ヶ月間にわたる必死の稽古の末、見事に形になりました。

初日のマチネ、塾生は皆緊張していました。ゲネプロでのダメ出しに対してギリギリまで稽古していたからです。冒頭はドロシー役とトト役の二人が楽しく踊るシーンで、高いテンションが必要でした。舞台袖で少し表情が硬い二人は幕の開いた舞台上がっていきます。いざ舞台に立つと役者としての表情は消え、見事に“役”として躍動しているのです。その後はピンチを迎えたドロシーとトトのもとへ、桃太郎、金太郎、浦島太郎が自前の武器を携えて駆けつけます。ヒーロー登場にピンチだった空気感が変わります。練習した殺陣で悪者を蹴散らしてかっこいい登場を果たしました。積み上げてきた稽古は嘘をつきません。一時間半の芝居中、ほとんど出ずっぱりで見事に役を演じきってくれました。全五公演はリピーター率が高い公演となりましたが、塾生の熱量が舞台の上に乗った結果だと思います。

■芝居塾を終えて

芝居塾の運営に関わらせていただいて、普段はできないような芝居を作り上げる事ができたのが大きな喜びです。芝居を始めたばかりだからこそできる、エネルギーに満ち溢れた塾生の演技は観る人に、新しい事を始める勇気を与えてくれました。芝居塾という企画を通じて成長できたのは塾生だけではなく感じています。

最後に、企画に関わってくれた全ての方々に感謝を述べたいと思います。芝居塾に関わらせていただき、誠にありがとうございました。





ゲーテ座は、我々劇団横濱にゆうくりあにとってもゆかりの深いシアター。劇団が発足してからの初期の7～8年くらいに拠点としていた。懐かしい空間である。もともと演劇専用空間ではなくて、ピアノ発表会やコーラスなどで使われることが多かったと思う。浅めの奥行やホリ裏を通っての上下移動にはつど楽屋を経由しなければならないことや、舞台上面の照明吊り込みボタンが少ないなどの制約がある。そんな空間的制約を逆手にとって自由な舞台設計を披露して見せてくれた。

場内に入ってまず気が付いたのは客席レイアウトである。舞台センターに小振りな張り出しを設けて、そこから客席を真中で割るように舞台方向に対して上下に分けて、斜めに配置したのである。さらに二つのエリアに分かれた客席の間を通り抜けて舞台センターからまっすぐにロビーエリアへと動線を設定した。そのことで場面転換に際して暗転を使わずに役者のハケと出をスピーディに切り替えることができた。それが芝居全体のスピーディな仕上がりに貢献した。舞台美術、装置も近未来をイメージさせる切れのある仕上がりになっていたと思う。

こうした視覚的効果が芝居そのものの切れの良さと相まって、最近のG/9の舞台設計や空気感の醸成に寄与している。特に今回は舞台の基本設計をはじめ、照明の仕込み方やさらには衣装にも工夫を凝らした跡がうかがえ、スピーディなリズム感となっていた。それは今回参加した五名の塾生の若さともマッチしたのではないだろうか。

作品のルーツがファンタジーストーリーの定番とも言える「オズの魔法使い」であることはタイトルからも明らか。衣装やキャスト配役にそのファンタジーな味付けを感じ取ることができる。オリジナルでは二人の女の子が異世界に飛び込んでしまうところからはじまり、そこからさまざまな出会いや事件に遭遇しつつ物語が進んでいく。

オープニングで主人公の二人の女の子が英語で会話（これはオズの魔法だから必然か？）。異世界に飛び込んだその先は、怪しの空気をまとう日本。なので以降は日本語で物語が進むことになる。そしてそこに何故か三人の太郎が登場。これはオリジナルでは三人の同行者が登場するのだが、そこをおとぎ話にネタを得て

三人の太郎に仕立てた。つまり金太郎、桃太郎、浦島太郎。二人の女の子と三人の太郎、この計五名が今回の塾生たちであり、彼らがチームとなって物語の目標に向かって走り出す。さらにここは日本であり怪しの存在と相まみえるということになれば、陰陽師の出番。安倍晴明である。さらに世界を混迷に陥れた張本人が酒吞童子。そう、舞台は古の京都であると判明。しかし登場人物たちの衣装や武器などは極めて未来的。だってそこはファンタジーの世界なんだから細かいことは気にしないでね、というノリ。その異世界を五名の若者たちが伸びやかに楽しんでいる。その姿は観ていて実にいい。

G/9がこのところの舞台で意識している派手目のアクションシーンも、劇団員に伍して塾生たちはしっかり挑戦していた。ときどき危うげな場面も見受けられたが、それはご愛嬌か。何より楽しそう、これが大事。塾生の一人はほぼ舞台経験ゼロというが、気後れすることなく溶け込んでいるように見えた。



TAK（神奈川県演劇連盟）の年間活動計画の中でもとても重要な位置づけを持つ芝居塾。神奈川県とTAKとのコラボにより当初は高校生をターゲットとして生まれた企画は、TAKの加盟劇団持ち回りで毎年開催してきた。例年5月頃に参加希望者を募り、劇団員である社会人とともに基礎トレや舞台制作の裏側などを学び、夏休みをフル活用して稽古を行い8月の終わりに公演を行うのが主流となっている。記念すべき第1回目の芝居塾（2007年）をにゆうくりあが担当した際、筆者は演出を担った。あれから15年以上を経過して、今は高校生に限定せず社会人にも枠を広げているが、二十代までの若い人を対象とするコンセプトは変わらない。ただし昨年度で神奈川県とのコラボ体制はなくなったため、今回はTAKの単独開催となった。結果的に味のある空間だった青少年センター二階のスタジオHIKARIは使えない。全国の高校演劇あるいは若い世代を取り込んだ神奈川県が誇るべき演劇企画として、もう一度神奈川県とのコラボ企画が復活されることを願っているが、どうだろうか・・・

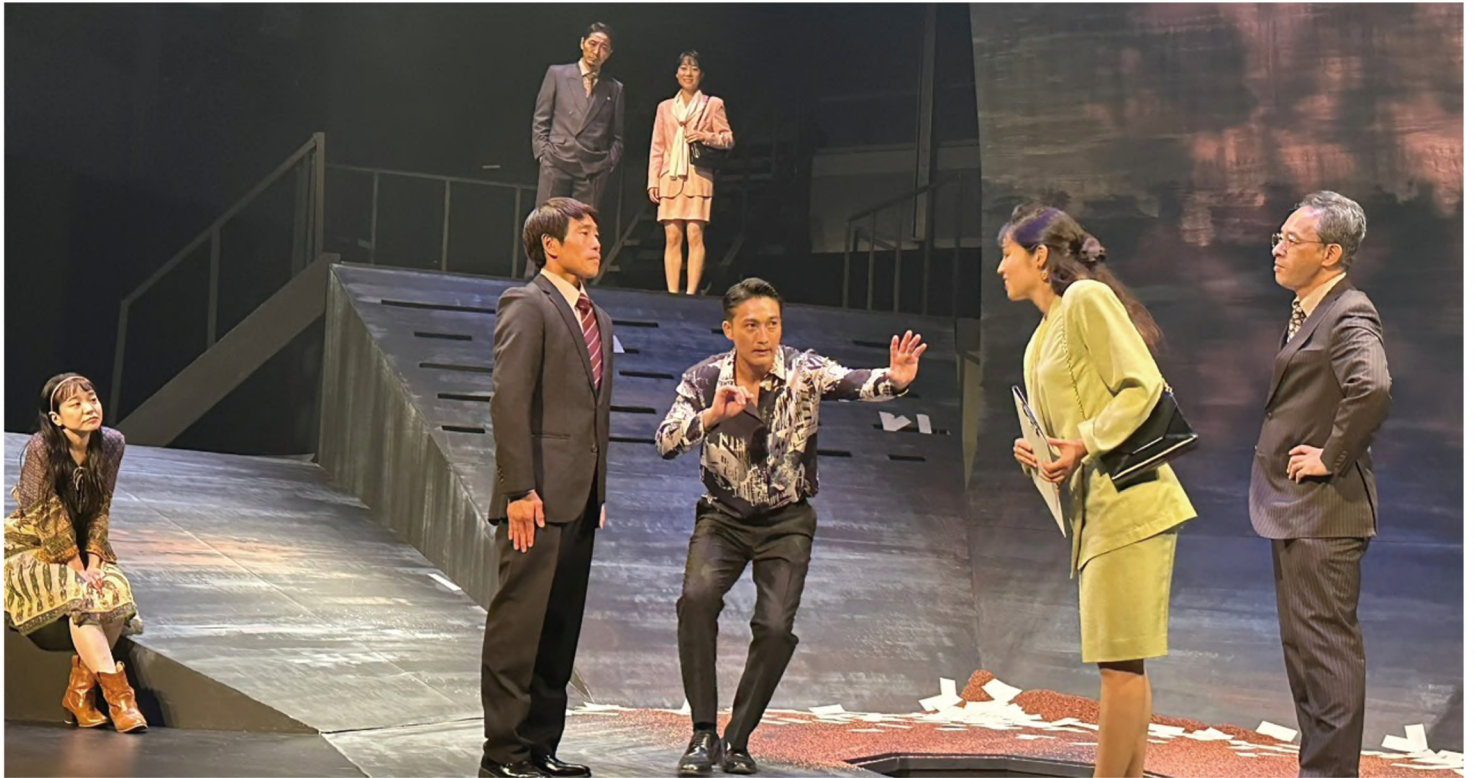
文：吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）



TAK in KAAT

『血の底』

2023年8月24日(木)~27日(日) KAAT神奈川芸術劇場 大スタジオ



【総評】文：緑慎一郎（演劇プロデューサー『螺旋階段』）

KAAT神奈川芸術劇場が2011年に開館してから12年。神奈川県演劇連盟とKAATが提携してTAK in KAATを毎年開催してきました。演劇プロデューサー『螺旋階段』としては2011年4月に中スタジオで湘南・西相地区合同公演を企画してから毎年のように数多くの演劇公演に参加させて頂いてきました。当劇団が担当として今回のTAK in KAAT公演を行うにあたり、これまで演劇を通して関わった大勢の方の力を借りました。また育成を兼ねて年齢不問のオーディションを行い、キャスト総勢28名の中に1名の中学生を起用しました。一ヶ月半の稽古の中で芝居だけではなく美術・音響・照明の裏側を学ぶことができました。

「血の底」は血の繋がりと地の繋がりの話です。バブル期の小田原と横浜を舞台に土地を取り合う者たちと家族を中心に様々な人が交錯します。憎しみを背負う者、巻き込まれていく者、追いかける者。人が生きるという中で何が生まれて何が消えていくのか。自分で穴を掘り起こし、それを埋めて何を見つめるのか。穴の中から空を見上げてそのあまりの高さに何を思うのか。世の中はうまくいかないことだらけかもしれない。だけど、小さな光を見つけてそれに縋り、守るために歩み続けていく。「血の底」は救いのない話かもしれませんが。それでも血と地が繋がる時間をずっと客席から固唾を飲んで見守ってくれたお客様に盛大な拍手を頂き大変感謝しています。

毎年新作を2本程度書いてきました。脚本総数は50本近くになります。これまで書いてきたどの脚本よりも濃密で多くの人物が絡み合う話となり、上演時間は二時間半という作品でした。何年も前からKAAT大スタジオの高い天井を見上げるたびに考えていました。この大スタジオで穴を掘りたいと。役者が土を掘り起こし舞台に舞うような芝居をしたいと。舞台美術家の根来美咲

さんにずっと会うたびに相談してきてようやく形となった「血の底」です。一つの作品を作るには多くの人々の力と時間を借りて出来上がります。多くの人との出会いが「血の底」に繋がっていると実感しました。僕がこの借りたものを返すにはいい作品を作ることだけだと思います。この場所でまた芝居を創るならばどのような舞台装置がいいのだろうか。この場所でまた脚本を書くのならばどのような物語を書いてみようか。何年経っても何度公演を行ってもまだやれていないことだらけです。今回の作品に関わってくれた全ての人に感謝いたします。

また、神奈川県演劇連盟、KAAT神奈川芸術劇場には多大なるご協力とご迷惑をお掛けしました。本当にありがとうございました。また、戻ってきます。もっともっといい芝居を引っ提げて戻ってきます。





参加者の声

1990年、土地神話に沸いたバブル期が崩壊していく前夜を描いた「血の底」。私にとっては劇団Q+（所属劇団）に入ってから初の客演作品となりました。憧れのKAAT（しかも大スタジオ！）に立てるといことで始まる前からワクワクしていましたが、始まってみると総勢28名の実力俳優達が揃い踏みしており、ドキドキが上回ったのを覚えています。

作品のカラーもあり強面な印象のあったキャスト陣でしたが、いざ稽古が始まってみるとそれはもう、大の大人が本気でふざけて遊んでおり楽しいのなんの…！本番前の一週間は集中稽古だったため、正味丸二週間で共にしたキャスト・スタッフ陣。そのお

かげもあって更に距離が縮まり、よりお芝居にグルーブ感が生まれた期間となりました。

演劇の楽しさというものを改めて感じる事ができたTAK in KAAT。本当に貴重な体験をさせていただきました。ご観劇いただいた皆様、キャスト・スタッフの皆様、この度は本当にありがとうございました。

文：小夜子（劇団Q+）



劇評 TAK in KAAT 『血の底』

「神奈川の地で活動し続け50年。神奈川県演劇連盟が誰にも負けないもう一つの演劇の形を、皆様にお届けします。」をキャッチフレーズに2011年4月に始まったTAK in KAAT。今回は演劇プロデュース『螺旋階段』さんの「血の底」が上演された。上演時間は2時間半。観る前は上演時間の長さに驚いたが、非常に重厚なストーリーでとても面白かった。言い方が合っているか分からないが、まるで1本の映画を観たかのような完成度の高さで満足感のある作品であった。

1990年代、バブル期の株価最高潮から一気に下落する時代が舞台。不動産会社の社長：今垣雄太郎と、何も出来ないが何でもやる男：原田秀樹との出会いを中心に進むヒューマンドラマ。不動産会社社長のサクセスストーリーかと思いきや、それぞれの家族や巻き込まれる人々のドラマも描かれ、広い意味での縁について考えさせられた。

冒頭、精神世界のような場所で穴から砂を掻き出すシーンから始まる。砂の音が非常に耳触りが良い。穴は血の底のイメージであろうか、全体的にすり鉢状になった舞台セットが印象的。階段を使い、高低差を上手く利用しているシーンも多く見られた。独特な舞台のかたちにも関わらず、室内のシーンから屋外のシーンなど場所の切り替えも無理なく行われており、スムーズに物語に集中する事ができた。

衣装も時代背景の表現としてとても効果的だった。舞台がバブル期という事で、特に女性陣の衣装やメイクは当時の流行りをよく研究されていると感じた。キャラクターによって色合いがはっきりと分かれており、個性的で舞台の見やすさを助けていたと思う。逆に男性陣はほとんどの方がスーツという衣装の性質上、差を付けるのが難しいと思うが、どの人物が出てきたのかを認識するまでに多少時間を要してしまった為、もう少し見た目から分か

る個性を持たせてくれたら更に物語に入り込みやすかったとも思えた。しかしストーリーの重厚感からみてもあの衣装だからこそ当時のリアリティが生まれていたとも思う。

そして、役者ひとりひとりが舞台を魅せる、という意識がとても高く素晴らしかった。滑舌や発声、立ち振る舞いに気を遣っていたからこそ、比較的登場人物が多い作品ではあったが伝えるべき事がきちんと伝わる舞台だった。螺旋階段さんが普段からそういった意識についてきちんと稽古をされている様子が伺え好感が持てた。

私の中での作・演出の緑慎一郎氏の作品は、人情味があり温かいものが多い印象だった。一方今作はシリアスな展開が多く人によってはトラウマを抉られるようなシーンもあったように思う。しかしラストは希望が持てるものであり、ひとつの時代の終わりと始まりを表しているようで美しかった。私自身はバブル期をほとんど経験していない為、当時の雰囲気は分からないが、今の世にはない勢いや強さがあつたように思う。もちろんアップデートしなければならない部分はあるが、ある種情熱のようなものは忘れてはならないと感じさせられた。

また、人間は誰も自分以外の人間と関わって生きていかねばならず、そんな中で小さな出会いひとつ取っても実は数えきれない無数の事象が関係し合って成り立っている、ということを改めて認識させられた。それが意図的であれ無意識であれ、所謂“ご縁”とは不思議なものであり、どんな事柄にせよ当たり前ということはないのだと感じた。

この作品を観劇できたご縁に感謝すると共に、今後の螺旋階段さんがどんな作品を生み出していくのか楽しみでならない。素敵な舞台を観せていただき有難うございました。

文：宇佐美愛咲（プラスチックな月）



2023年度神奈川県演劇連盟合同公演情報

■合同公演に向けて

2024年2月26日～3月3日に開催を予定している合同公演は、毎年、神奈川県演劇連盟（以下：TAK）が神奈川県立青少年センターとの共催で行っている事業です。TAK加盟団体が団体の枠を超えて集うお祭りという意味合いもあります。

TAKの総力を結集し、プロ・アマ問わず、参加者もお客様も楽しめるクオリティの高い公演にできるよう、出演者・スタッフ一同、力を合わせて臨みたいと思います。



■ワークショップ稽古

各団体、それぞれの方法論や技術論があり、それが個性であり魅力につながっています。合同公演という多様な価値観を持つ演劇人が集い、芝居作りをする上で、チームとして演技に対する共通認識を持つため、今年9月からワークショップ形式の稽古を行い、対話と技術交流をしています。

theater 045 syndicate の中山が中心となり、俳優の身体・思考にアプローチするレクチャーやゲーム、テキストを使ったトレーニングを週1回行っております。合同公演のみならず、出演者の皆さまのスキルアップにつながるようなワークショップを通して本番に向けて腕を磨いています。

■本年度の合同公演は

直近の2回はコロナ禍の中開催されました。2021年度は一本の作品ではなく様々な短編作を集めたショーケース公演、2022年度は紅葉坂ホールの改装に伴いスタジオHIKARIでの上演でした。

本年度の合同公演は、装いも新たになった紅葉坂ホールでの2年ぶりの上演、そして神奈川県演劇連盟の創立60周年の節目でもあり、連盟役員も若い世代に交代した記念すべき公演になります。心機一転、新しいやり方で合同公演に臨んでおります。

演出は中山、脚本は「プラスチックな月」主宰の福本ぼう之介氏が担当します。過去にはシェイクスピア「オセロー」や西遊記、南総里見八犬伝をモチーフにした作品を上演しました。古典をベースに、外連味ある設定と軽妙な語り口で魅せる芝居が福本氏の持ち味です。



■脚本：福本ぼう之介、演出：中山朋文の初タッグ

中山と福本氏の初めての接点となったのは、2023年8月に開催されたTAK in KAAT 『血の底』です。しかもこの時は作家と演出家という立場ではなく、同じ出演者としてでした。福本氏は中山の演出作を、中山も福本氏の脚本作を互いに見てはいましたが、作家・演出家としてタッグを組むのは今回が初。

そこで今回、互いの芝居作りに対する考え方を話し合ってみました。

福本：中山さんの演出した『ヨコハマ・ヤタロウ』が大好きで、世界観や演出のダイナミックさに圧倒されました。今回ご一緒できるのはとても光栄です。

中山：ありがとうございます！そのお言葉を自分で記事にするのは何ともこっぴどかしいのですが（笑）。私も福本さんの合同公演での劇作を拝見していて、古典をベースにぶっ飛んだ設定にしてみたり、軽妙なセリフ回しが面白いなあと感じていました。おそらく面白がっていることは似ているんだろうな、と。

福本：自分の団体『プラスチックな月』では僕が書いて演出しています。自分の本を外部の演出家に託すときは基本的にお任せしています。すると自分が思いもしなかった解釈や演出法が飛び出すことがある。自分の想像を超えた化学反応が楽しい。

中山：私は自分で本を書くことをしないので、作家から預かった本がどれだけ面白いのか、ということをお客さんに伝えることを大事にしています。できた芝居はまずは作家に喜んでもらいたい。本に敬意を払わないとお客さんには伝わらないと考えています。

福本：今回は単純に「書く」という行為が楽しくなりそうです！ワークショップに参加している役者たちの顔を浮かべながら「この役者さんにこんなコト行ってほしい」とか考えるとワクワクします。書いていくと登場人物がしゃべりだす。登場人物が僕を挑発してきたり、逆に鼓舞されたり。時には登場人物のセリフに泣きながら書くこともあります。「いいコト言った！」みたいに。自分で書いた言葉なのに（笑）。

中山：それは作家の喜びですね。私にとっても紅葉坂ホールという大きな会場での演出は、大きなチャレンジです。みんなで面白がっていい芝居にしましょう！



今回の合同公演の出演者は20名以上となる予定です。年齢層も幅広く、神奈川演劇の多様さを表すような座組になります。

紅葉坂ホールという大きな舞台上、多様な価値観を持った神奈川演劇人たちが一つの作品を作り上げ躍動します。東海道中膝栗毛をベースに、主人公二人の旅路を邪魔する暴君が出てきたり、平賀源内がなにやらとんでもない発明をしたり・・・と、何が飛び出すかわからない冒険譚を現在絶賛執筆中です！

2年ぶりの紅葉坂ホールでの合同公演、ぜひご期待ください！

文：中山朋文 (theater 045 syndicate)



■劇団の紹介

初めまして。演劇ユニット【ドリル饅頭】の中西広和です。まだ劇団ではありません。恐らく、いえ恐らくではありませんね。ドリル饅頭と名乗っているのは、私一人しかおりませんので、個人ユニットというカテゴリーに入ります。2017年に下北沢で名乗りをあげました。しかし2020年以降から今日に至るまでは、自主的に活動自粛をしておりましたので、実質、ユニットとしての活動期間は、まだ3年程度と言うことになります。

作風としては「人と人の繋がり大切さ」を大きなテーマとして、その時々によってコメディ・シリアス・サスペンスと、やり方がコロコロ変わるので割と定まってない印象がありますが、結局のところ「人と人の繋がりって大切だよ」という所に帰結しておりますので、芯はブレずに作れているのではないかと勝手に自負しております。大きなテーマを色んな形で伝えし、最後はちょっぴり泣けちゃうような作品をお届けするユニット、それがドリル饅頭です。

■劇団名の由来

饅頭と言うのは、文字通りお饅頭でございまして、私は温泉饅頭なるものが大好きで、ある時、温泉饅頭を食べながら、ふとこんな事を思ったのです。温泉饅頭って早く食べないとすぐ腐っちゃうんだよな～……。そうです。アシの早い食べ物、それがお饅頭なのです。フワフワと柔らかく足の早い食べ物、これはまさに小劇場界にも同じ事がいえるのではないかと。面白そうな劇団はすぐ観ないといつの間にか消えて無くなっている。しかし、またすぐに面白い劇団が次々と出てくる。そしてまた消えていく。淘汰の激しい世界。そんな小劇場界は、まさに温泉饅頭のようなのです。そんな温泉饅頭のような小劇場界にドリルで風穴を開けるような存在になりたいな、と、いう思いで、ドリル饅頭というユニット名に致しました。

■今後の公演情報

今年の5月以降、新型コロナウイルス感染症が5類に引き下げられたのを機に、久しぶりに単独公演なるものを打って、一人でも多くの演劇大好きな神奈川在住の皆様を知って頂こうかと思っております。身の丈に合ったサイズ感で、神奈川県演劇人の皆様のお力をお借りしながら、少しずつ公演を打っていければと考えております。

■将来の目標（やってみたいこと）

将来的な目標として、ドリル饅頭を個人の演劇ユニットではなく、劇団にしたいという思いはあります。やはり一人でやってみて思った事は、あまりにも大変だと言う事。そして、一人の力なんて本当にちっぽけで、出来ることにも限界や制限が出てくる、と言う事です。神奈川県演劇連盟の諸先輩方的確なアドバイスやご協力のもと、劇団化を目指して行こうと思っております。

■神奈川県演劇連盟について

今年の9月に正式加盟させて頂いたばかりなので、本当はまだこれから新参者です。私は甘い物好きで酒好きと言う、ちょっと特殊な体質なので、まずは、そこを受け入れて貰う努力をしていこうかな、と。演劇と全然、関係ないじゃないか、と、思われるでしょうが、人と人の繋がり大切さを重んじるドリル饅頭なので、まずは人として、私と言う人間を皆様に知って貰おうと思っている次第です。演劇に関する云々かんぬんは、二の次です。まずは私と言う人間を曝け出す。これは演劇を作る上でも重要です。『人柄』というのはとても重要な要素で人柄というのは、その人がどう生きてきたかという証。その証は、どんなに取り繕っても、作風や演技に必ず滲み出てきます。人生の筆跡とでも言いましょうか、どんなに誰かの筆跡を真似たところで本人の筆跡は変わらないのと同じことです。可能な限り出来る事を精一杯尽くし、これから連盟を盛り上げられるような一員として頑張りたいと思っております。



■芝居づくりで大切にしていること

とにかく私は、スタッフ、役者の人柄を重要視しています。なのでお稽古よりも、お稽古が始まる前の方に沢山の時間を掛けて人を選びます。舞台作品というのはテクニカルなスタッフをはじめ、共演者、お手伝いさんなど、色々な方々を巻き込んで初めてお客様にお見せ出来るものです。その為には、それぞれが思いやりや協調性、意思疎通を計るコミュニケーションが大事になって参ります。今の時代、個を重んじる事や、個々の多様性を尊重する風潮がありますが、そこを尊重するがあまり、誰かの時間を奪ってしまうのはいけません。私はとにかく、座組の全員が、心晴れやかに初日を迎え、笑って千種楽の幕を降ろせるような舞台を心掛けておりますので、ドリル饅頭への参加がその人にとって辛い過去にはなって欲しくないのです。訳のわからない事を言う共演者や演出に悩み、寝不足となり、ふらふらになりながら稽古場へ行く大変な現場は非常に苦手です。故に稽古は、可能な限り、ゆとり（稽古場以外で役者やスタッフが考える時間）を持たせつつ、作品の精度を上げる作業を大切にします。『稽古はやらせる6時間よりもやる気の2時間』とはよく言ったもので、私自身、プレイヤーとしては精神力や体力がべらぼうに乏しいポンコツだったので、重い空気が長時間続くような過酷な現場に出くわすと早めに電池切れを起こし、如実に動作が鈍くなり、最後は心を閉じてしまいます。そうなる演技の積み上げや稽古効率も悪くなりますし、いたずらに時間を浪費するだけです。自分自身がそうだったので、ドリル饅頭をやる時は、役者やスタッフがそうならないよう適度な休憩を挟みつつ、集中力が途切れないようなやり方をしています（当たり前かっ！）。私は都度、座組を組む際には、芝居の上手い下手の前に、座組に対し協調性を持てる人かどうか、お芝居に対して誠実、かつ真面目であるか、役に対して探究心や好奇心があるか、まずはそれらを慎重に見極めながら、同じ方向を向ける人達が揃ったらスタートラインに立つようしております。

資料室だより

■演劇資料室からオススメの一冊

「演劇入門～生きることは演じること～」

(鴻上尚史 著/集英社新書)

演劇をやろうと考えている人々、始めて間もない人々、つまり若い世代の皆さんにお勧めしたい。かといって演劇入門書の類ではない。演劇論とか演技論という前に、演劇って、演じるってどういうことなんだろう？を解りやすく語ってくれる。そして同時に演劇に長くかかわっている人間にも、演劇というものの本質を再考するきっかけを与えてくれる。かねてより鴻上尚史という人は、優しい人だと思っていた。目を細めた彼の笑顔のイメージに似て、その語り口から感じられる人柄の魅力がこの本から伝わってくる。2021年の刊だから、まだ書店やアマゾンで入手可能。本のタイトルが「演劇入門」なので演技演劇論の基礎を分かりやすく説いてくれる技術解説書かと思えるが、実は表紙に散りばめられたサブタイトルにこの本の説くところがはっきり見えている。「生きるとは演じること」「日本人には芝居が足りない」「空気を読むな。空気を創れ」・・・これらの言葉がこの本で作者が伝えようとするものを明確に伝えている。

最初のページ<はじめに>を開いてみる。扉に記された著者の言葉がある。曰く、僕が自信を持って言えることはひとつ。それは“演劇は楽しい”ということ、だと。そしてもうひとつ“演劇には人間を皮むく力がある。その人の隠れていた本質を引き出したり、拡大したり、あらわにする能力がある”と語る。彼の語る言葉の中からひとつ具体的なエピソードを取り上げてみよう。それは舞台演技と映像演技の違いについてだ。二つの表現芸術を対比させて説明している部分は、わかりやすく面白い。映像には生の舞台とは違う作り方がある。例えばアクションショットだ。主人公の演技力にちと問題ありという場合、バイプレイヤー（和製英語だそうです）を巧みに配し活かすことで、映像作品として引き締まった出来上がりにすることができる。その他いろいろな技術を駆使して、上映にこぎつけるまでに工夫できる。しかし、演劇ではこれが難しい。それは加工できないナマを見せな

ればいけないから。さらにもうひとつ映像と演劇の差は稽古量にあるとも述べている。映画のリハーサルに対して演劇では稽古。演劇の稽古のほうが圧倒的に長い時間をかける。ちなみに作者が率いる第三舞台の旗揚げでは、毎日10時間を週6日、それを半年続けたという。すごい熱量だ。厳しいが羨ましくもある。こうした具体的な例を挙げながら、芝居の経験の浅い人々にとっても理解できるように説明してくれる。鴻上はやっぱり優しい（これは多分に筆者の思い入れかも）。

ところで、本を読むときは頭から順にページを辿りながら読み進めるのが一般的だが、この本はちょっと違う読み方ができる。目次に並んだ見出しの中からお気に入りを見つけ、とびとびに拾い読みができる。参考までにいくつか文中の小見出しを列挙してみよう。それだけで、この本から何を学べるか、あるいは気づかされるかがわかる。

- ・演劇はお客さんによって変わってゆく
- ・俳優の感じた感情は観客に伝わる
- ・「舞台の上で漂う」
- ・「幻の共同体」—観客が観客に出会う
- ・心を閉じた会話のつまらなさ
- ・自画像という練習方法 等々・・・

いかがだろう？クイズみたいに言葉が並んでいて面白い。芝居を志そうとする皆さん、さらにはもっと高みを目指そうという人にとって必ず刺激となり役立つ一冊だ。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）



【鴻上尚史、渾身の一作!】

「演劇は劇場にだけあるものではありません。あなたがいて、目の前にもう一人の人間がいれば、またはいると思えば、そこに演劇は生まれるのです。もし、あなたが目の前にいる人に何かを伝えたいとか、コミュニケーションしたいとか思ったとしたら、演劇のテクニックや考え方、感性は間違いなく役に立つでしょう」

演劇資料室

【開室時間】

平日（火曜～金曜） 13:00～22:00（貸出は21:30まで）
土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）

【休日】

月曜、年末年始

※上記以外にも休室日がございます。

ホームページをご確認の上、お越しく下さい。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485



神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ■ケル・ベッパー ■京浜協同劇団 ■劇団蒼い群 ■劇団河童座 ■劇団砂からマカロン
- 劇団820製作所 ■劇団「無題」 ■劇団横濱にゆうくりあ ■theater 045 syndicate ■G/9-Project ■ドリル饅頭
- プラスチックな月 ■マシュマロ・ウェーブ ■まりこ☆みゅーじあむ ■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
- 横浜小劇場（横浜演劇研究所附属） ■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 90号

【発行】神奈川県演劇連盟（2023年11月30日）

【編集】オッサたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳紘（劇団820製作所）、
中山朋文（theater 045 syndicate）

【ホームページ】<http://kenenren.org/>

